

アジア史講座

第 6 卷

監 修 京都大学教授 羽 田 明

西アジア史 東西交通史

西アジア史

近代以前の西アジア

近代の西アジア

東西交通史

東西交通の起源

陸上交通の発達

海上交通の発達

モンゴル時代の東西交通

モンゴル帝国崩壊後の東

西交通

岩崎書店

アジア史講座 6

西アジア史
東西交通史

監修 京都大学教授
羽田 明

岩崎書店

図書館分類カード書式 (サンプル)

220	ア	ジ ア 史 講 座 6 西アジア史
		羽田 明 監修 東京 岩崎書店 昭和32 196p. 21.5cm
¥ 360		

貴校の図書カードに左の様にお書きこみ下さい

アジア史講座 第6巻 西アジア史
東西交通史

検
印
廃
止



著
者
諒
承

1957年12月20日印刷
1957年12月25日発行

定価360円

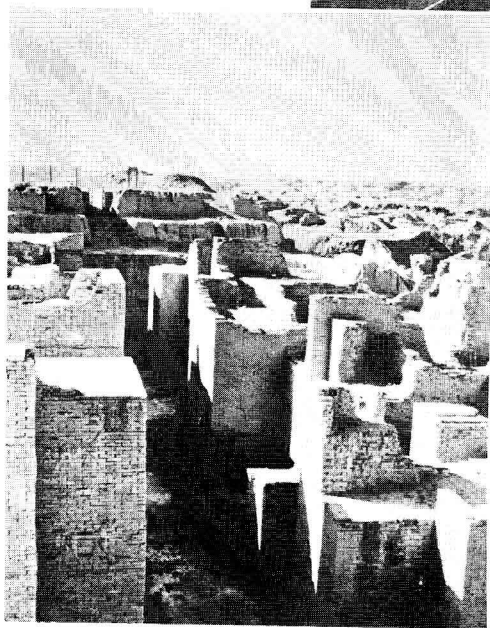
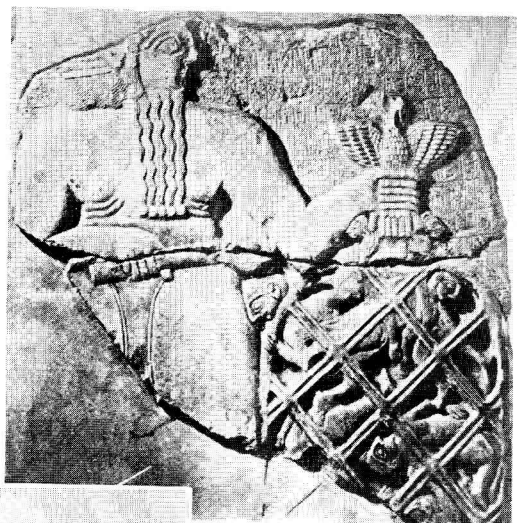
監修者 田 村 実 造
羽 田 明
発行者 岩 崎 徹 太
印 刷 新興印刷製本株式会社
製 本 株式会社 福島製本

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩崎書店
神田神保町1丁目65
振替東京 96822 編集部 東京(29)3121-4
営業部 小石川(92)8095

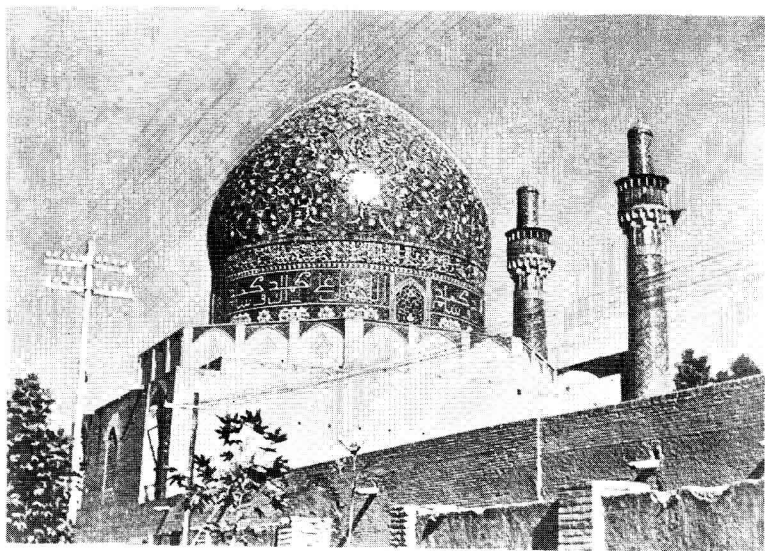


I ペルセポリス「百柱の間」北門のダリウス大王像

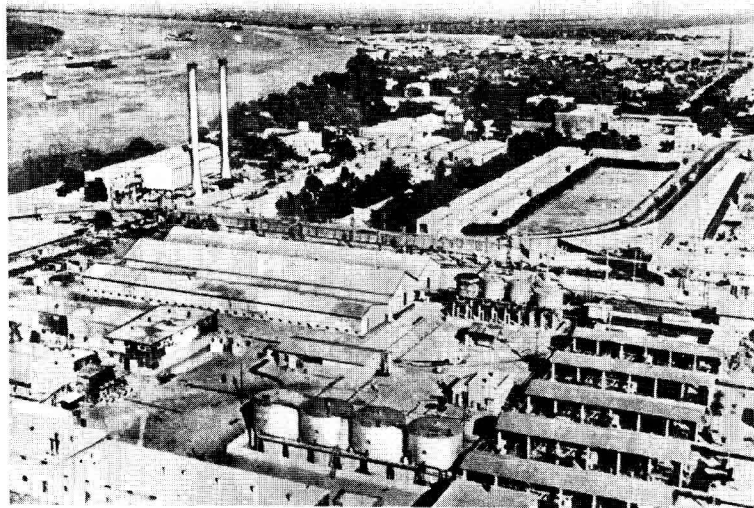
Ⅱ 禿鷹の神
(シュメール時代の浮彫)



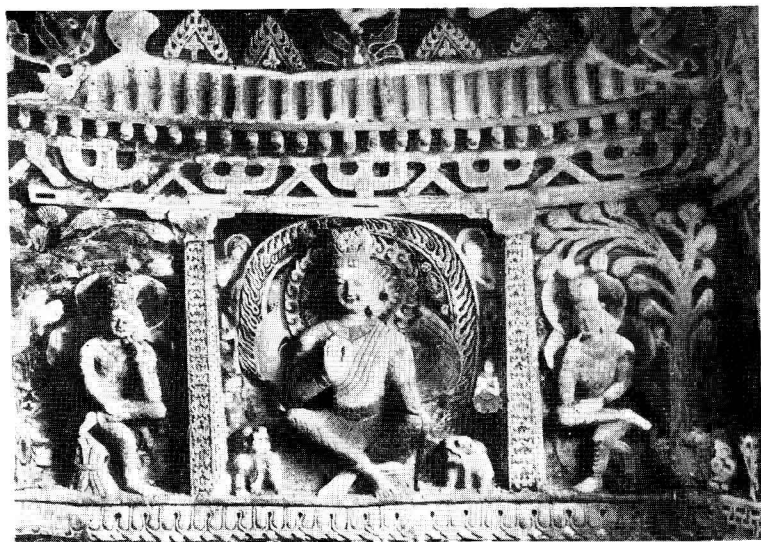
Ⅲ バビロンの遺跡



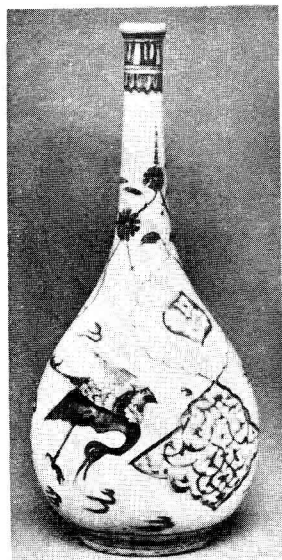
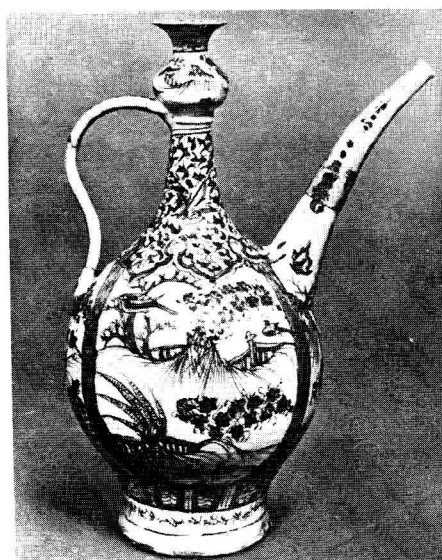
Ⅳ イスパハーンのモスク



Ⅴ アッパダーンの精油所



Ⅵ 雲岡の石仏（第九洞）



Ⅶ 中国陶器を模したペルシアの染付（15～6世紀）

は し が き

西アジアの歴史は、アジアの歴史、というよりも世界の歴史において占めるその比重の大きさにもかかわらず、一般にはあまり良く知られていない。また、現在この地域を舞台としてつぎつぎに生起し、世界の耳目を聳動させている諸事件にしても、西アジア史の十分な知識がなければ、本当には理解できない。このような理由から、この巻では、できるだけ多くの紙数を西アジア史に充て、東西交通史の概要を付録した。

歴史的世界としての西アジアは、メソポタミア、エジプトを中心としたいわゆる古代近東地域から、古代ペルシア帝国の時代には、地理的西アジアの全域に拡大し、イスラム帝国時代以後は、さらに北アフリカからヨーロッパの一部までをそのうちに含み、ほとんどイスラム世界の同義語として、今世紀のはじめにおよんだ。ただ、アジア史の一部としての西アジア史という立場から、本書の敘述は主として地理的西アジアに向けられている。

アジア・アフリカ・ヨーロッパ三大陸の結節部に当り、海陸の東西交通の最要衝を占めた西アジアの社会や文化の発達は、概してもっとも速かであった。しかし、その一方では、ここを舞台として、早くから周辺の諸民族の争覇戦がくりひろげられ、民族の交代が目まぐるしかった。王朝の興亡はしばしば民族の交代を意味した。あるいは、その方が多かったといってもよい。しかも、西アジアの社会や文化は、その長い歴史を通じて、終始一貫した性格をもち伝えて近代に至っている。本書で、古代・中世・近代、もしくは内容的にはほとんどこれと相違のない前イスラム時代・イスラム時代・近代の三時代区分法を採らず、近代以前と近代に分けた理由もそこにある。

これまで、西アジア史といえ、何人かの専門家が共同執筆するのが普通であり、そのために一貫した歴史の流れが見失われがちであった。西アジア史を専攻する新進の藤本勝次君が単独で執筆した本書は、この欠点を除くことに成功したものと信じる。記述に足りないところや誤ったところがあれば、それは原稿に目を通し、時には手を加えた監修者の責任である。

付録の東西交通史では、最初の約束に反して、敘述の焦点を中国におき海陸の両道に分けて、中国を中心とする東アジア世界と西方の諸歴史的世界との交通の発達を概観するにとどめた。これは、紙数の関係以外に、南アジア史や西アジア史で述べられていることがらとの重複を避けるためもあったが、何と云っても、根本的には、執筆者の準備不十分のためである。読者諸氏の宥恕を願う。

アジア史講座も、この第6巻の刊行によって、ひとまず完結する。願ひれば、第1巻の出版くらい2年以上の長年月になる。この間、ひきつづいて愛読して頂いた読者諸氏に対してはもちろん、絶えず迷惑ばかりかけてきた岩崎書店編集部の方々に対しても、心から謝意を表したい。

1957年12月8日

田 村 実 造
羽 田 明

アジア史講座 第6巻 目次

は し が き

西 ア ジ ア 史

第1章 近代以前の西アジア	1
1 古代オリエン特時代	1
西アジアの黎明	1
旧石器時代 新石器時代 新石器時代の遺跡 農耕 民族と遊牧民族	
メソポタミアの国々	6
シュメール人の都市国家 領土国家への発展 アッカ ード王国 バビロン王国 アーリア民族の侵入と諸王 国の並立 ヒッタイト王国 セム系商業民族の擡頭	
世界帝国の出現	14
アッシリア帝国 4国並立とカルデア王国 ペルシア 帝国の統一 ペルシア帝国の滅亡	
古代オリエン特の社会と経済	18
神政政体と国王の絶対性 古代オリエン特の3階級 奴隸制度 土地所有制 商業の発達	
2 ヘレニスティック＝オリエン特時代	24
ギリシア人の西アジア支配	24
アレクサンダーの世界帝国 アレクサンダーのペルシア 化 セロイコス王朝 ギリシア化政策 西アジアの 分裂	

東西の抗争	29
パルティア王国の勃興 パルティア王国の国家組織	
パルティア王国とローマ ササン朝ペルシアの興隆	
ササン朝の国家体制	
社会と経済	36
社会構成 土地所有制 ササン朝の税制 東西貿易	
の発展	
3 イスラーム諸国の変遷	41
アラブ民族の勃興とサラセン帝国	41
イスラーム以前のアラビア マホメットとイスラーム教	
正統カリフ時代 東西への発展 支配体制 ウマイ	
ア朝の成立 アラブ至上主義 アッバース朝の交代	
帝国の分裂	
イラーン・トルコ西民族の継承	53
イラーン系諸王朝の分立 トルコ族の擡頭 セルジュ	
ク＝トルコ帝国と十字軍 モンゴル族の支配 トルコ	
・イラーン族の民族的自覚 オスマン＝トルコ帝国の興	
隆 帝国の国家組織 サファールヴィー朝ペルシア	
社会と経済	66
カリフ制 イスラーム社会の構成 土地所有形態の変	
化とイスラーム封建制のおこり オスマン帝国の封建制	
度 イスラーム商人の活躍	
4 西アジアの文化	76
宗 教	76
バビロニア・アッシリアの神々 ゾロアスター教 ユ	
ダヤ教とキリスト教 宗教界の混乱 イスラーム教の	

特質	イスラーム教の分派	
学術	科学の芽生え　ヘレニズム時代　イスラームの学術	84
文学	バビロニアの宗教文学　ペルシアのパフラヴィー文学 イスラーム文学	90
美術	古代メソポタミアの美術　アケメネス朝ペルシアの美術 ヘレニズム美術　ササン朝ペルシアの美術　イスラームの美術	93
第2章	近代の西アジア	101
1	トルコ民族の動き	102
	オスマン＝トルコ帝国の崩壊	102
	帝国の衰勢　後退と分裂　改革へのうごき　青年トルコ党と第1次世界大戦	
	新しいトルコ	107
	トルコ共和国の誕生　ケマル＝パシアの改革　国際的地位の強化　第2次世界大戦とトルコ　トルコ共和国の現状	
2	イラン民族の動向	113
	イランの没落	113
	分裂と混乱　カージャール朝とヨーロッパ列強　帝国主義への屈服　民族運動の発生	
	イランの再建	118
	パフラヴィー王国の成立　レザー＝シアールの再建政策 第2次大戦とイラン　石油問題	

3 アラブの覚醒	123
エジプトの場合	123
メフメット＝アリー朝の成立 イギリスの支配と抵抗	
エジプトの独立 第2次大戦後のエジプトとスエズ問題	
アラビアの場合	131
民主主義のおこり 第1次世界大戦とアラブの反乱	
英・仏の背信とアラブの独立 第2次世界大戦とアラブ	
諸国家 アラブ連盟の成立 アラブ世界の現状	
4 近代西アジアの社会と経済	141
社会と経済の諸問題	141
経済の後進性 人口問題 土地制度の改革 教育の 欠陥	
西アジアの産業	145
農業 灌漑施設の拡張 工業化の促進とその問題	
石油産業の発展	

東 西 交 通 史

1 東西交通の起源	155
陸上交通	155
草原の交通路 オアシスの交通路	
海上交通	157
2 陸上交通の発達	158
「絹の路」の成立 ソグド人の活動 イラン文化の流 入 唐帝国とサラセン帝国	
3 海上交通の発達	165

	南海航路の開拓　崑崙人の活動　サラセン人の東洋貿易　中国人の南海進出	
4	モンゴル時代の東西交通	171
	陸上交通　海上交通　サラセン系文化の流入	
5	モンゴル帝国崩壊後の東西交通	176
	ティムール帝国と東西交通　明の対外政策と東西交通	
	欧人の東洋来航	
	参考文献目録	181
	索引	

監　修　者　京　都　大　学　教　授　羽　田　明

執　筆　者

西　ア　ジ　ア　史

関西大学助教授　藤　本　勝　次

東　西　交　通　史

京　都　大　学　教　授　羽　田　明

第1章 近代以前の西アジア

1 古代オリエント時代

西アジアの黎明

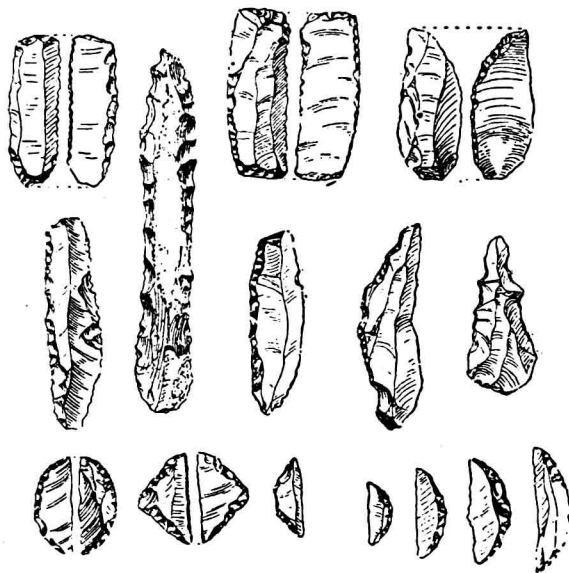
旧石器時代 地質学上洪積世とよばれる大昔には、地球の北半部が長い間氷河にとざされた時期が4回もあり、そのなかで比較的気候の温暖であった間氷期に、人類の祖先が現われたといわれている。ところが、西アジアには氷河におおわれた形跡もなく、寒冷な氷河圏に南隣して、現在とまったく違った多雨多潤の気候に支配され、樹木も繁茂し、古生人類の生棲に適していたらしい。

西アジアにおいて今日までに発見されている旧石器時代の遺物は、ヨーロッパ地域に比較すると、きわめて僅少であるが、イラーン Irān 高原やカスピ Caspi 海の沿岸、あるいはアラビア半島内部にも、シェレアン Chellean 期に属する打製石器が出土しているし、現在ではまったく人跡未踏のアラビア半島東南部にあるルブ＝アル＝ハーリ Rub al-Khālī 砂漠内においても燧石^{すい}の石器が発見されることがあり、旧石器時代人の生棲を証拠づけている。さらに考古学的調査の進んでいるシナイ Sinai 半島やパレスティナでは、ムステリアン Moustierian 期に属する小形の石斧、石刀、石^{せき}七が多量に残っていて、ガリラヤ Galilee 湖西北岸の洞窟から発見された人骨は、ネアンデルタール Neanderthal 型人類と同系統のものと推定されている。なお、おなじくムガラ al-Mughara 出土の小児骸骨^{がい}は、忽然^{じつ}として絶滅したと考えられているネアンデルタール人と旧石器時代の後期すなわち約5万年前に現われた現在人類 Homo Sapiens との中

間的人類であると報告されている。

さらに詳しいことは今後の調査発掘にまたなければならないが、すくなくとも西アジア各地にはネアンデルタール型の旧石器時代人が洞穴などに居住し、狩猟生活を営んでいた。かれらにとって絶好の住地であったに違いない。

新石器時代 長い旧石器時代を過ごしてきた人類は、さらに新しい技術を獲得しはじめた。石材を打ちくだいたり、あるいは剥いてつくった打製石器から、石材を磨いた磨製石器を使用するようになり、同時に食物を火で調理し、これを貯蔵するために土器を製作した。つまり不安定な狩猟・^{ぎょうりう}漁撈生活を清算して農耕・牧畜による生活の安定を確保する方法を考え出



1図 パレスティナ出土の中石器

し、いわゆる新石器時代が始まる。

おそらく西アジアの人類がもっとも早く新石器文化を開拓したのであろう。

さて、旧石器時代末期にはいるにしたがって、北半球地方の氷河が融けはじめ、次第に気候が温暖になり

だすと、反対に西アジアでは順次乾燥してゆき、砂漠になりはじめた。そこで、この風土の変化に適応するために、西アジアの古代人類は遊牧生活を営むようになった。新石器時代における遊牧生活様式の発生は、モンゴ

リアから中央アジア・西アジアをへて北アフリカにつづく、一連の遊牧圏を構成し、家畜の皮をはぎ、肉を削りとるのに使用する細石器をその文化の特色とするが、西アジアでは、シリア Syria・パレスティナにおいてエジプトと同様の半月状の細石器が出土している。

一方、西アジア古代人類の遊牧生活化の傾向と平行して、砂漠化からまぬがれ、ところどころに残った泉の周辺のおアシス Oasis とか、ティグリス・ユーフラテス両河の流域平野やイラーン高原の河川流域では、木材や葦と粘土で小屋を建て、定住村落を形成して農耕牧畜生活を営むものが現われた。これらの農耕地域から西アジアの文明が芽生えてゆくのである。

新石器時代の遺跡 このような新石器農耕文化の遺跡は、現在のロシア＝トルキスタンのメルヴ Merv 附近にあるアナウ Anau, イラーン高原西辺のスーサ Sūsa, 南部メソポタミアなどにその代表的なものがみられる

約1万年前にはじまるアナウ最古の文化は、西アジア各地と同系統の黒色の彩色手製土器をその代表とするもので、当時すでに小麦・大麦を栽培し、馬・羊なども飼育していたらしい。前6000年ごろにはその農耕技術も相当に進歩していたと考えられ、無文様で斑点のある紅色または灰色の土器を作成している。この種の土器はシリア・小アジア・エジプト初期の土器と同じ形で、これらの地方との密接な文化交渉が考えられている。

第2の遺跡としてあげられるスーサは、イラーン高原西辺ケルカ Kerkha 河畔にあり、歴史時代のエラム Elam の地で、メソポタミアとはつねに政治的交渉をもったところである。スーサ出土の遺物から推定するとすでに前4000年ごろには農耕を営み、石器とともに銅器をも併用していたらしく、西アジアの全般的特色である黒色の幾何学文様をもつ彩色土器を作成し、中には動植物の模様を配するものもある。すでに相当遠隔地と